

畏友 福沢翁を謳う

古聖宣はく学を好むは知に近く力行するは仁に近しと
来し方を顧みるに我が境涯何ぞこの至言に愧じんや
思へば幼童にして赤貧を洗ひ弱冠十有五にして鉄工を生業とす
炎昼に五体を汗として呻吟し寒夜に手を擦りて文机に向ふ孜孜営々の烏兔
書籍常に我が前にあり筆墨また恒に座右にあり
炎熱膚を焦がすとも寒風骨を貫くも刻苦勉励に寸も遲疑なく毫も懈怠なし
斯く苦学力行の螢雪裡に知らず春秋は経巡り星辰は天球を移ろひ廻る
幾星霜は須臾にして今や陋巷の白髪翁となるも志学の一念紅顔の昔日に変わらず
日夜唐国の古書に親しみ秋津洲の古典に耽る是我が乾坤なり
就中西洋数理の学は是即ち我が魂魄にして是が究理に夜を明かし日を暮らす
数術難問の叢林に迷へば没我懊悩に疾く深更を過ぎ
曉闇に至りて遂に求法一条の曙光射す亦嬉しからずや
かほどの粒々辛苦を以て何の実利を得るやと人間はば
胸底に隠然と呟く燕雀焉んぞ鴻鵠の志を知らんやと
而して昂然と面を上げ呵々と答えん世人は財を追ひ我は智を求むと
我が学びは濁世に黄白青錢を追ふ便法に非ず酒食蓄財また我が事に非ず
唯に無可有の塵外境に遊び夏炉冬扇の道を楽しみ以て我が玉を磨くものなり
かの良寛曰く囊中三合の米炉辺一束の薪を以て安息すと
斯く世俗の名聞を忘れ名利を思わず無位にして孤高無冠にして不羈を愉しむ
東に聳立する先哲の驥尾に附し西に屹立する先賢の泰山に攀じんと冀う
依て数の哲理を究め以て世界の秘奥を窺わん
美衣美食豈この喜びに如かん粗衣粗食何ぞこの志気を挫かん
嗤ふべし高位高官の栄輝金銀宝珠の栄花如何でこの楽しみに及ばんや
術理の大洋に寄る辺なき孤舟を浮かべ黙念と独り漕ぎゆく
智慧の蒼穹は無路遙かにして学理の海原また茫洋限りなし
綾目分かたぬ茫々の大海は我が指す枝折の他に如何でか道あらん
迷ひ深くして即ち舳先を転じ又進みては即ち迷ふ彫心鏤骨の独行独歩
然れども山頭火曰く一步即一切一切即一步なりと
我が才のよし如何に拙くもあれ我が老ひの残喘はよし幾許にもあれ
一漕に一漕を重ね一步に一步を継ぎ限りある身の力試さん
天より授かるこの道を拝し父母より享くるこの身を謝す
今宵また一穗の灯を友として机前に端座す
鳥に空あり魚に水あり而して人に道あり
その道を独りゆく老骨求道の消光亦楽しからずや

二〇一八年 如月二十三日

寸虫 謹呈